

# 原始佛教に於ける止觀の研究

增 永 靈 凤

## 一、止觀の意義

佛教に於ては實踐道の大綱として、一般に戒 (sīla) 定 (samādhi) 観 (paññā) の三學を擧げてゐる。この三學は已利長部<sup>\*1</sup>、沙門果經や同一六<sup>\*2</sup>大涅槃經<sup>\*3</sup>、長阿含四卷遊行經を初めとして、三藏中到る處に存する分類である。併しかかる總括的分類はそれ以前に尙雜多なる實踐道の存在を豫想しなければならないから、非常に古いものとは考へられないのである。一般に定慧に配當される止觀が三學の組織された後の成立か否かは明かでないけれども、禪定の問題を中心として作り出されたもので、相當古い組織であると思はれる。蓋し現存の漢巴兩阿含中舊きものにも可成多く其の名を見出し得るからである。然らば止觀の字義は如何であるか。

止は奢摩他 ('Samatha, samatha, Shignas) であら、觀は毘鉢舍那 (Vipasyanā, vipassanā, Ihammthon)<sup>\*4</sup> である。リス<sup>\*5</sup> デビツヅは止を calm ふし、觀を insight, intuition と譯してゐる。ノイマンは前者を Ruhe ふし、後者を Klarsicht と譯してゐる。<sup>\*6</sup> ニヤナチローカ氏は「止とは緊張せる精神集注即ち定によつて得らるる不動の心狀態であり、觀とは五蘊の無常苦無我に於ける知見である」となしてゐる。Dhammasaṅgī<sup>\*7</sup> には止を正定に當て、觀を正見に配してゐる。

從來止は停止・寂止・止息等といはれ、心停住して動せず、煩惱寂然として止息したる状態であり、觀は觀照・觀達・貫穿等といはれ、觀智通達して、無明を貫穿し、如實にものを認識するをいふ。故に止は心を寂靜にすること及び寂靜にされた状態、觀はものを如實に知見する事及び知見する力をいふ。然らば止觀と禪定との關係範圍は如何であらうか。

(一)止觀は根本四禪である。(二)止觀は廣き意味に於ける禪定觀法である。従つて四禪は固より、四無色定・四無量・四念處・八解脫・八勝處・九相・十念・十想・十一處等をも包攝する。(三)止觀は禪定・智慧である。これら三つの立場の中私は第三に依つて、止に四禪を中心とする禪定一般を含ましめ、觀に無常苦無我の三相・四聖諦・三明六通等を含ましめて、説明したこと思ふ。元來止觀は車の兩輪の如く、俱行するの要がある。而も均等なるを以て理想的とする。

やれば法句經三七「<sup>\*8</sup>無<sub>レ</sub>禪不<sub>レ</sub>智、無<sub>レ</sub>智不<sub>レ</sub>禪、道從<sub>ニ</sub>禪智、得<sub>ニ</sub>至<sub>ニ</sub>泥洹」(N<sup>\*9</sup>āthi jhānañ appaññassa pāññā n'atthi ajhāyato, yamhi jhānañ ca paññāca sa ve nibbānasantike)とある。雜阿含十七卷四六四には「<sup>\*10</sup>禪<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>專精思惟<sub>上</sub>所謂止觀。……修<sub>ニ</sub>習於止<sub>ニ</sub>終成<sub>ニ</sub>於觀<sub>ニ</sub>修<sub>ニ</sub>習觀<sub>ニ</sub>已」。亦成<sub>ニ</sub>於止<sub>ニ</sub>謂聖弟子。止觀俱修。得<sub>ニ</sub>諸解脫界<sub>ニ</sub>」とある。雜阿含二十一卷五六〇にも「止觀和合。俱行作<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>是正向多住<sub>ニ</sub>則斷<sub>ニ</sub>諸使<sub>ニ</sub>」とあり、相當經たる巴利增支部四・一七〇・四も亦「止觀均等に行せらるならば道生ずるなり」と述べてゐる。蓋し止に偏すれば昏沈となり、觀に傾けば散亂となるからである。止觀はかく俱修せられねばならないが觀を得るには止が必要条件たるべし」とは勿論である。

\* 1 D. N. II. sāmañña-phala sutta vol. I p.63

\* 2 D. N. XVI. Mahāparinibbāna sutta vol. II p.123

\* 3 大正一卷 115頁

\* 4 Dialogues of the Buddha III. p.206

\* 5 Die Reden Gotama Buddha's, aus dem mittlere Sammlung Majjhima-Nikāya Bd. II S.327

\* 6 Zeitschrift für Buddhismus V über die buddhistische Meditation von Nyānatiloka S.131

\* 7 P. 232, 1355, 1356 \* 8 俱舍論二十八卷 大正二十九卷 一四五頁

\* 9 Seidenstueker, Pali-Buddhismus S.245 \* 10 法句經三七二 沙門品參照

\* 11 大正四卷 五七二頁 \* 12 Dhammapada p.53

\* 13 大正二卷 一一八頁 \* 14 大正二卷 一四六頁

\* 15 A.N vol. II P.157

### II' 止觀の目的

長阿含一卷大本經には「如來大智微妙獨尊、止觀具足成<sup>\*1</sup>最正覺」<sup>\*2</sup>とあり、巴利相應部四・九・一一とも「比丘等よ、又何をか無爲道となすや。曰く、止なり。是無爲道と言はるなり。又何をか無爲道となすや。曰く、觀なり。是無爲道と言はるなり。」<sup>\*3</sup>とおいて正覺や無爲即ち涅槃を體現する」とが其の目的とせらるるのである。是を他の方より「比丘等よ、貧賤癡(以下惡德十四)を覺知するためには、正に二法を學すべし。何をか二法と云々。曰く、止と觀となり」<sup>\*4</sup>と巴利增支部一・一・七・三四下は説いてゐる。中阿含十五卷<sup>\*5</sup>十喻經には倫理的に「若比丘比丘尼成<sup>\*6</sup>就止觀<sup>\*7</sup>以爲車者、便能捨<sup>\*8</sup>惡修<sup>\*9</sup>習於善」<sup>\*10</sup>とある。更に滅盡定(nirodhasamāpatti)に入るべく道として、巴利相應部四・七・六・一三<sup>\*11</sup>には「居士よ。滅盡定に達せんがためにせ二法即ち止觀が甚だ有用なり」とあり、其の相應經なる雜阿含二十一卷五六八に

は「比丘入滅正受」著作於「法止以觀」と述べられてゐる。滅盡定に就ては後に觸れる機會を持つであらう。尙雜阿含七卷一八六には「謂斷色過去未來現在無常。乃至滅沒。故修止觀。受想行識。亦復如是。是故諸所有色……彼一切非我非異我。不相在。如實知。受想行識。亦復如是。多聞聖弟子。如是觀者。於色生厭。於受想行識生厭。厭故不樂。不樂故解脫。解脫知見」とあつて、止觀が無常無我の認識に導き、軀て解脫知見を得せしむるを説いてゐる。又巴利相應部二二〇六六<sup>10</sup>には「比丘等よ、心定に住せる比丘は如實に知る。色の習及び滅、受想行識……」とあり、相當經たる雜阿含三卷六五には「常當修習方便禪思。內寂其心。所以者何。比丘常當修習方便禪思。內寂其心。如實觀察。云何如實觀察。此是色、此是色集。此是色滅。此是受想行識……」とあるが如く其の内容は俱に止觀であらねばならない。雜阿含十六卷四二八にも同様の文あり、巴利相應部五二一<sup>11</sup>と二<sup>12</sup>とには心定に住せる比丘は四聖諦を如實に知ると述べてゐる。上の文例によつて見るに止は我等の心を寂靜にし、觀は如實にものを觀察せしむるものなることを知るのである。又巴利相應部五一・一五九・六及び增支部四二五一<sup>13</sup>には「比丘等よ。法智のために何が修せらるべきや。止觀は法智のために修せるべきなり」とあり。巴利增支部一五四<sup>14</sup>には *cetosamatha* (心止) と *adhipani-dhamma-vipassana* (增上慧法觀) とあるも同じく止觀に外ならない。更に巴利中部七三一 *Mahā-vacchagotta sutta* には「汝、婆蹉よ二法即ち止と觀とを更に増修せば、種々界を觀了するに到るべし。(以下六神通)」とあり、その相當經たる雜阿含三十一<sup>15</sup>四卷九六四には「有二法修習多修習所謂止觀。此二法修習多修習。得知界果。覺了於界。知種々界。覺種々界」如是比丘。欲求離欲惡不善法乃至第四禪具足住。慈悲喜捨。空入處。識入處。無所有入處。非想非非想入處。令ニ我

三結盡。得<sub>ニ</sub>須陀洹。三結盡。貪恚癡薄。得<sub>ニ</sub>斯陀含。五下分結盡。得<sub>ニ</sub>阿那含。種々神通境界。天眼天耳。他心智。宿命智。生死智。漏盡智。皆悉得。」とある。是によつて止觀は四禪、四無量、四無色定を成せしめ且六神通等を得せしむるを知る。併し是に關しても尙後に觸れて見たいと思ふ。最後に巴利增支部<sup>\*17</sup>一〇には「比丘等よ、茲に明への力となるべき二法あり。何をか二法といふ。止と觀となり。比丘等よ。止増修せらるれば何の利を受くるや。心増修せらるるなり。心増修せらるれば何の利を受くるや。凡そ貪愛なるもの彼れ捨離せらるるなり。比丘等等よ。觀増修せらるれば如何なる利を受くるや。智増修せらるるなり。智増修せらるれば何の利を受くるや。凡そ無明なるもの彼れ捨離せらるるなり。されば比丘等よ。心貪欲に染すれば解脫せず。無明に染すれば智を得ざるべし。實に比丘等よ。此等諸欲を離るれば心解脫あり。無明を離れば慧解脫あるべし」とあつて止觀の目的を最も克明に表現してゐるのである。蓋し止によつて貪欲を滅盡して心解脫を得、觀によつて無明を滅盡して慧解脫を得るからである。而して增一阿含<sup>\*18</sup>十一卷七には「阿練比丘當<sub>ニ</sub>修<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>法。云何二法。所謂止與<sub>レ</sub>觀也。若阿練比丘得<sub>ニ</sub>休息止。則戒律成就不<sub>レ</sub>失<sub>ニ</sub>威儀。不<sub>レ</sub>犯<sub>ニ</sub>禁行<sub>ニ</sub>作<sub>ニ</sub>諸功德。若復阿練比丘得<sub>レ</sub>觀已。便觀<sub>ニ</sub>此苦<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>實知<sub>レ</sub>之。觀<sub>ニ</sub>苦習<sub>ニ</sub>觀<sub>ニ</sub>苦盡<sub>ニ</sub>觀<sub>ニ</sub>苦出要<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>實知<sub>レ</sub>之。彼如<sub>レ</sub>是觀已。欲漏心。解脫有漏心。無明漏心得<sub>ニ</sub>解脫。便得<sub>ニ</sub>解脫智。生死已盡梵行已立。所作已辨更亦不<sub>ニ</sub>復受<sub>ニ</sub>有如<sub>レ</sub>是知<sub>レ</sub>之。過去諸多薩阿竭阿羅訶三耶三佛皆由<sub>ニ</sub>此二法<sub>ニ</sub>而得<sub>ニ</sub>成就。所以然<sub>ニ</sub>者。猶如<sub>レ</sub>菩薩坐<sub>ニ</sub>樹王下<sub>ニ</sub>時<sub>上</sub>。先思<sub>ニ</sub>惟此法<sub>ニ</sub>止與<sub>レ</sub>觀也。若菩薩摩訶薩得<sub>レ</sub>止已。便能降<sub>ニ</sub>伏魔怨。若復菩薩得<sub>レ</sub>觀已。尋成<sub>ニ</sub>三達智。成<sub>ニ</sub>無上至真等正覺。」と述べ止觀に權威を附してゐる。止

によつて戒律を成就し、威儀を失はず、禁行を犯さざるに到り、觀によつて四諦を如實に觀察して解脱智を得るに到る。更に過去の諸佛もこの法に依られたるを説き、止によつて惡魔を降伏し、觀によつて三達智（三明）を得るとなしてゐる。是を要するに止觀の目的は心解脫慧解脫を得るにあり、而してその結果心は寂靜に歸し、転て三相・四聖諦を覺了し、三達智特に漏盡智を得るに到るであらう。

- \* 1 大正一卷 一〇頁 \* 2 S. N. vol. IV p.362
- \* 3 A. N. vol. I p.100 \* 4 大正一卷 五一九頁
- \* 5 S. N. vol. IV p.294 \* 6 大正二卷 一五〇頁
- \* 7 大正二卷 四八頁 \* 8 S. N. vol. III p.15
- \* 9 大正二卷 一六頁 \* 10 大正二卷 一一一頁
- \* 11 S. N. vol. V p.414 \* 12 S. N. vol. V p.51
- \* 13 A. N. vol. II p.247 \* 14 A. N. vol. V p.99
- \* 15 M. N. vol. I p.295 \* 16 大正二卷 一二四六頁
- \* 17 A. N. vol. I p.61 成實論十五卷 止觀品 大正三十二卷 三五八頁
- \* 18 大正二卷 六〇〇頁

### 三、止觀の内容

一般に禪定は止觀の止に配せられてゐる。元來禪定は禪 Dhyāna, jhāna と定 samādhi とを結合したものであるが言語の上よりすれば二者聊か意味を異にする。禪 Dhyāna は Vāyāna より來り根本的には精神を保持するの意であり、一般に靜慮と譯されてゐる。婆沙論<sup>\*1</sup>百四十一卷には「靜謂寂靜、慮謂籌慮」とあり、俱舍論<sup>\*2</sup>一十八卷には「依何義故立靜慮名」由此寂靜能審慮故審慮即是實了知義と釋されてゐる。即ち禪は散亂を離れて寂靜に住し、如實に對境を認識し思慮するをいふ。されば根本禪は止・觀の兩方面を具備するともいはれてゐるのである。定 samādhi は sam-ā-Vāyā で根本的には物を纏めて取るの意である。中阿含五十八卷法樂比丘尼經には「若善心得、一者謂、定也」とある。Visuddhi-magga III は「定とは如何なる義なりや。定とは善く定置するの義なり。何をか善く安置すとしよ。心心所を一境に平等に定置し安住せしむるをいふ。それ故にその法を行ずるによりて、心心所が一境に平等に善く動搖なく散亂なくして堅立す。こがよく定置すとの義なり」といひ、解脫道論<sup>\*3</sup>一卷分別定品四は「定者有清淨心、一向精進與寂靜功德等、正真住不亂、此謂定」と告げてゐる。故に定は心一境性 (Cittassa ekaggatā) を以て本義とする。要するに定とは惡不善の法を離れ、心を一境に專注して、不亂なるをいふ。然らば禪と定との關係範圍は如何であらうか。ハイラーに従へば定は廣く一般的なる概念とされ、禪は狭く特殊的なる概念とされてゐる。而して定は廣き意味に於ける精神集注又は冥想の全領域に對する一般名稱であり、禪は定を助くる特殊の沈思的方法であると言はれてゐる。ハイラーの見解は巴利分別聖諦經に四禪を以て正定の内容となすところより來るものであらうと思はれるが、原始佛教の範圍より言へ

ば或る程度まで首肯し得るであらう。けれども漢巴兩聖典中の用法を見るに巴利で唯 *jhāna* とあるを漢譯は禪定と譯し又 *paṭisallāna* や *paviveka* を禪思と譯してゐる例も存する。

原始佛教に於ては正定 (*sammāsamādhi*) の中に禪的修行を包括せんとし、大乘佛教に於ては、禪波羅密 (*Dhyāna-pāramitā*) の中に一切の三昧をも包攝せんとする例もあつて必ずしもその範圍を嚴密に規定し得ざる場合が多い。

却説佛教は何故にかかる禪定を重要視し又禪定に基く一系統を作るに到つたのであらうか。是に就ては印度に於ける氣候風土の關係民族の氣質をも考慮する必要が存するけれども大體次の如く結論し得ると思ふ。

(一) 佛陀が久しき苦行の後自ら行くべき道を求めて遂に「*我れは一切勝者なり、我れは一切智者なり*」との自覺に達して、所謂佛陀獨自の宗教を生み出された根本契機は實に樹下靜觀の禪定であつたのである。

(二) 佛陀が聖なる實踐の道として示された八正道に於て、正定は佛陀の根本思想を眞に我がものとなす最後の道であり、不動の自覺に達する最後の心的統一である。

(三) 右に關係することであるが佛教の宗教的意義を最も克明に表現せる四聖諦の理を如實に (*yathābhūtaṁ*) 諦觀するには禪定が最も重要な道とされてゐるのである。

(四) <sup>\*1</sup> 放逸を不死の道とし、放逸を死の徑となして恒に精進努力を尊ぶ佛教に取つて、專念專注を意味する禪定は不可缺の要件である。巴利分別聖諦經の註釋を待つまでもなく、努力策勵を意味する正精進の中心根據は正念 (*sammā-sati*) であり、正念を更に力あらしむるものは實に正定である。故に自然的立場を克服するには必然的に禪定を豫想しなけれ

ばならないのである。

(五) 佛陀の宗教は教義や信條による宗教ではなくして、直ちに人間の宗教意識の自覺に訴る體験の宗教である。かかる體験(Erlebnis)の眞髓をなすものは實に禪定である。他の宗教に於て、祈禱(das Gebet)が其の中核をなすやうに禪定は佛教の中心をなすものである。故に禪定を除ける佛教は全く意味をなさざるものとさへ言ひ得るであらう。試みに佛陀の傳記を見るに閻浮樹下の靜觀、二仙への問法、菩提樹下禪觀、轉法輪前の思惟、涅槃時の入定等重要事件には必ず禪定が伴ひ又日常生活も是を以て始終されてゐるのである。固より傳記を其の儘に採用することは不可能であるにしても、禪定が佛陀に於て重要な道であつたことは到底否定せられないであらう。

却說然らば原始佛教に於ける禪定は果して如何なる種類のものであつたであらうか。若し是を廣く言へば四禪・四無色定・滅盡定・四念處・四無量・八解脫・八勝處・九相・十想・十念・十徧處等をも擧げ得るであらうが併し一般には九次第定が最も多く言はれてゐる。四禪四無色定等の起原が佛教以外に存することは漢巴兩梵綱經や佛傳の既に述べる所である。而も其の内容を檢するに正統婆羅門の内に組織されたものとは到底考へられないのである。恐らく正統婆羅門以外の禪定修行者の中に作り出されたものであらう。巴利分別聖諦經に依れば正定の内容は四禪である。而して四禪は六十二見に於ける現在涅槃論中の四見である。四禪は經律の何處に存しても、常に一定したる型によつてゐるが、こは要するに宗教心理に基いて我々の心境が純化してゆく過程を組織したるものに外ならない。其の特徴を擧げてそれべく離生喜樂・定生喜樂・捨念樂住(離喜妙樂)・捨念清淨となしてゐる。最後の捨によつて念の清淨となれる第四禪に

到つて初めて理想を實現し得るのである。かくせば精神は止靜・清淨・透明・無垢となり、煩惱を捨離し、柔和善順にして、如何なる活動にも堪へ得るに到るのである。然るに巴利增支部八・四一・一三や中阿含四十三卷意行品等には四禪・四無色定・滅盡定によつて「我が心解脫は不動なり」(Akuppā me ceto-vimutti) との自覺を得たとの記事が存し、又巴利增支部八・四八・二以下には九次第定の現生涅槃を説ける文獻も見出し得るが、併し私は次の理由よりして是を否定したいと思ふ。

(一) 四無色定は元來死後それに相應する天に生れんことを豫想する限り、現生涅槃中の四禪とは全く性質を異にする定である。佛陀の根本的立場より言へば死後生天等を目的として、禪定を修するが如きことは到底あり得ないのである。(二) 巴利中部三六 <sup>\*22</sup> Mahāsacaka sutta や同 100 <sup>\*23</sup> Sangārava sutta 等には四禪による成道さへ説かれてゐる以上、是のみにて既に完備せる組織である。然るに四無色定を是に加上する必要は決してないと思ふ。(三) 右の理由を離れて四禪と四無色定との内容を比較するに四禪による成道や其の後の活動は考へ得るが四無色定にては其等を到底考へられないのである。(四) 減盡定は想受滅定 (saññāvedayitanirodhā-samāpatti) といふ異名の示す如く感覺や知覺の滅したる定であつて壽 (āyu) 煙 (usmā) 根 (indriya) 等の滅せらる點に於て、纔かに死と區別せられるものである。これは佛教以外の無想定の信仰に對抗して創唱せられて後八等至の上に加へられたものと言はれてゐる。勿論無想定とは異り、且それに相應する天の場所が言はれて居らず、又三界を超せんとする見解も窺はれるから、佛教の加上説とも見られるであらう。それにも拘らずかく無意識にして無活動なる状態を以て果して涅槃を實現し得るや又其の後の活動に堪へ得るや頗る疑

問とせざるを得ないのである。原始佛教に於てはかかる格式となる前の所謂禪定の根本精神による生活の淨化を重要視するものである。されば巴利增支部六・四三二長老偈六九六・六九七・中阿含<sup>\*24</sup>十九卷龍象經には行住坐臥悉く定に住すべきを説いてゐるのである。而して佛教の禪定が其の起原を自ら以外に持つてゐるにも拘らず、それらと多大の逕庭を持つに到つた根本理由は、(一)元來目的視せられた禪定を變へて滅苦の涅槃を實現すべき方法となし、(二)死後生ずると信ぜられたる天と禪定とを分離して、禪定による現世の得達を期し、(三)禪定より「我」を全く抜去れる所に存するのである。

かく禪定によつて煩惱止息し、内心寂靜に住せば一切のものを如實に認識し得るに到るのである。是所謂毘鉢舍那(觀)である。かくせば法句經に言はるる如く諸行無常・諸行苦・諸法無我を正見し得るのである。諸行無常・諸法無我は宇宙人生に對する事實判断である。この事實を主觀に把握して價値的に判断すれば諸法苦とならざるを得ないのである。而してこの苦の由つて來たる所は常住絶對を求めてやまざる愛欲(tanha)に存するのである。愛欲は固より無明(avijja)を豫想してゐる。この愛欲・無明を克服することは同時に苦を解脱することである。即ち愛欲を滅盡して心解脫(ceto-vimutti)を得、無明を滅盡して慧解脫(Pañña-vimutti)を得るに到るのである。かかる涅槃は所謂菩提を内容とする偉大なる人格の實現である。上の諸行無常・諸法無我・一切法苦はそのまま緣起觀である。緣起觀は人生の現實的考察より出發したものであつて、如何にして苦が存し、如何にして苦が滅するかを相互の關係をたどりつつ組織した體系である。従つてそれは決して縁つて起る過程を解釋する系列ではないのである。かの無明を世界人生の創造原理のやうに解

し、所謂轉變説と何等異ひやる説明を施さんとするが如きは全く佛陀の根本思想を誤れるものと斷じざるを得ない。ある。無明が明に轉ずるんと曰くの轉換生命的の革新を意味する。緣起觀の究竟目的は蓋し茲に存するのである。而して古來「<sup>\*18</sup>緣起を見る者は即ち法を見、法を見る者は即ち緣起を見る」(Yo patīccasamuppādān passati so dhammān passati, yo dhammān passati so patīccasamuppādān passati) 云々されてゐる。法(dhamma) 云々文字に就ては種々なる解釋も訛りやうが茲では教法理法の意であり、更に一般化されざるもの以外ならぬであらう。そして佛教の教法・理法を代表したものは四聖諦である。四聖諦は轉法輪經<sup>\*19</sup> (Dhamma cakkappavattana sutta) に存する如く憍陳如以下の五群比丘に説かれたものと傳れてゐるが併しかかる統一ある組織はもつと後の成立にかかるものと言はねばならないであらう。この四聖諦は象跡にも喻へられてゐるやうに佛教の宗教的意義を最も克明に表現せる組織である。從來四聖諦の解釋に於て苦集・滅道を果因・果因と配當し、更に世間・出世間に按排してゐるが併しかくの如きは餘りに阿毘達磨的風潮に左右され過ぎてゐると思ふ。苦と集とは決して結果と原因との關係ではなくして、歸結と根據との關係にあるのである。滅と道との關係も結果と原因とのそれでなくして、目的と方法との關係であらねばならぬのである。而して、は單なる斷片的羅列ではなくして、各内面的に有機的關係を持つるものである。苦・滅の隔りを擴大するものは集であり、縮少するものは道である。苦の根據たる集の正しき認識は目的を實現すべき方法としての道を見出す所以となるのである。かの外道が現實苦の由つて来る所を肉體に求めたるが故に滅苦の理想を死後に延長せざるを得なかつたのである。従つて理想實現の方法も徹底を缺き、單に一時を糊塗するに過がれぬものとなつてしまつたのである。蓋し正しき認識と

方法とのみが正しき結果を齎すからである。而してかかる正しき知見を得るには禪定即ち止が不可缺の要件となるのである。このことは巴利長部沙門果經や巴利相應部五・一一・一・等の明かに告ぐる所である。かく佛陀の根本思想を眞に知ることは慧であり、觀である。巴利分別聖諦經には八正道の正見 (sammādiṭṭhi) を解釋して四聖諦への知 (nāṇa) となし Dhammasaṅgāni は觀を正見に配してゐるが併し眞の意味に於ける觀は正見が正定を經て正智となつたものと言ふべきであらう。即ち正見が眞に我のものとなつた時初めて般若が獲得されるのである。般若の獲得は慧解脫の實現であるから、觀を解脫智となす見解が當然生れ來るのである。更に是を三達智 (川明 tevijā) や六通 (chaṭṭabhiññā) に關係せしむる例も存する。是等は廣き意味に於ける神通 (iddhi) の中に包括せられ得るものである。

三神變・四神足も亦神通として取扱はれてゐる。三神變 (tūṇi-pāṭihāriyāni) とは所謂神通神變・記心神變・教誠神變であるが其の中の教誠神變 (anusāsanipāṭihāriya) のみは佛陀の根本的立場に契當するが他の二つは寧ろ必要なきものと思ふ。されば佛陀は此等を厭ひ耻とし嫌はれた記事を「<sup>\*32</sup>巴利長部 I - Kevaddha sutta」存するのである。而して教誠神變に四聖諦を説いてゐる處が特に注目に値すると思ふ。

次に四神足に就て一言するの必要が存する。巴利長部大般涅槃經や漢譯遊行經乃至巴利相應部五・七・一〇・四等には四神足 (四如意足 cattāro idḍhi-pāda) を修したるものは一劫又はそれ以上の間生き延び得るとの記事が存し又巴利相應部五・七・一以下には四神足を得たる後六神通を得るといふ文獻も存するのである。四神足の原始的なるものはかかる超自然力に關係せしむるよりも慾(chanda) 精進(viriya) 心(cittā) 思惟(vimāna) の内容が示すが如く、四正勤(cattāro

<sup>\*30</sup><sup>\*31</sup><sup>\*32</sup><sup>\*33</sup>

*sammappadhanā*) 等と内面的に本質關係を保つべきものであらう。巴利長部沙門果經には四禪を修したる後六神通を得ると述べられてゐるが、この六神通の中初の五神通即ち神足・天眼・天耳・他心・宿命は外道の中に既に存したものと言はれてゐる。その一一を検するに何れも常人の及ぶことなき超自然的力である。故に是等を佛陀が果して承認せられたかは頗る疑問である。されば増一阿含四十六卷には「世俗五通非<sub>ニ</sub>眞實行」後必還失、六通者是眞實行」とある。第六漏盡通のみは佛陀の加上と見てよいであらう。蓋しこは佛陀の根本思想に契當するもので、佛教の目的實現には實に不可缺の要件であるからである。この漏盡通を説く文献には明らかに四聖諦の如實知見を述べてゐる處、正に教誠神變に相通するものである。漏盡通を神通中に入れたのは禪定によつて得る内面生活の自由を具體的に表現したまでであつて、決して超自然力を意味するものではないのである。三明は宿住智證明・死生智證明・漏盡智證明で六神通中の三であるが、中に就て漏盡智證明は最も重要な地位を占むべきものである。

尙三三昧・四無量・四念處・八解脫・八勝處・八念・九相・十念・十想・十徧處等も廣き意味に於ける止觀の中に包攝せられ得るものであるが今は是等を割愛したいと思ふ。

茲に所謂觀慧は清淨經衆聚經十上經等が説ける如く、正智正解脫又は正解脫正智の正智を意味する。そは決して相對的知識ではなくして體驗によつて實證せられたる絶對智であり、解脫智であらねばならない。故に觀を得れば當然無知の無明は斷破せられるのである。而して無明は註釋による限り四聖諦への無知であるからその破斥は四聖諦への正知を意味する。四聖諦は佛陀の根本思想であり、又宇宙人生の眞理であるから、觀によつて宇宙人生の如實相を正當に認識

し徳ぬといふとなるのである。禪定は一面心の散亂を止息し、我執我欲を制すると俱に他面是に依て得たる力を基とし  
「ゆの」を正當に認識し審慮して無限の生命活動に赴くのである。根本禪定は定慧均しあが故に止觀均等であるとする意  
味も盡し妙に存すると言はねばならないやうである。尚縦然とも事項も残されてゐるが今は以上にとどめるに止む。

\* 1 大正二十七卷 七二六頁

\* 2 大正二十九卷 一四五頁

\* 3 大正一卷 七八八頁 M. N. 44 Cūla-vedalla sutta vol. I p.301

\* 4 Visuddhi-magga vol. I pp.84—85

\* 5 大正三十一卷 四〇六頁

\* 6 Die buddhistsche Versenkung. S.15 \* 7 S. N. vol. V p.393 divā pavivekāva rattim patisallānāya べ

雜阿含三十卷八五五は晝夜禪思ふなや。 \* 8 大智度論十七卷 大正二十九卷 一八五頁

\* 9 M. N. 26 Ariyapariyesana sutta vol. I p.171 \* 10 M. N. 36 Mahāsacca sutta vol. I p.247

\* 11 Dhammapada 21 p.4 緯 1 化緯二十七卷 大正二十九卷 六九六頁 瞬目念誦遊行經 大正一卷 一六六頁 我云不放燄故曰燄

覺、無量衆善亦由不放燄也。 \* 12 Oldenberg; Buddha S.359 Was für andere Religionen das

Gebet ist für den Buddhismus die Andacht der Versenkung. Belk; Buddhismus S.57 Wie für andere Religionen das Gebet den Nerv des religiösen Lebens bildet, so ist für Buddhisten dieser Nerv des religiösen Lebens die Meditation ...

\* 13 Milindapañha p.38 \* 14 M. N. 36 Mahāsacca sutta vol. I p.246

\* 15 M. N. 26 Ariyapariyesana sutta vol. I p.163. p.165 \* 16 D. N. 16 Mahāparinibbāna suttanta vol. II p.156

- \* 17 M. N. 141 *Saccavibhaṅga* sutta vol. III p.249 \* 18 D. N. I. *Brahmajāla* sutta vol. I p.39
- \* 19 A. N. vol. IV p.448 \* 20 大正 1卷 700頁 701頁
- \* 21 A. N. vol. IV P.454 \* 22 M. N. vol. I p.247
- \* 23 M. N. vol. II p.212 \* 24 A. N. vol. III p.346
- \* 25 Theragāthā p.70 \* 26 大正 1卷 608頁
- \* 27 Dhammapada 277—279 p.40 S. N. vol. IV p.1 Yad aniccaṁ tāni dukkhaṁ, yaṁ dukkhaṁ tad anattā, yad anattā tāni  
netam nama nesoham asmi na meso attāti. \* 28 M. N. 23 Mahāhatthipadopama sutta pp. 190—191 7卷合7卷  
象跡鑑經 大正 1卷 四六七頁 若見<sub>1</sub>緣起，便見<sub>2</sub>法<sub>3</sub>，若見<sub>2</sub>法<sub>3</sub>便見<sub>1</sub>緣起<sub>4</sub>，
- \* 29 S. N. vol. V p. 421 *Mahāvagga* p. 10 綜合十卷 大正11卷 10四頁
- \* 30 D. N. 2 *Sāmañña-phala* sutta vol. I p. 84 \* 31 S. N. vol. V p. 414
- \* 32 D. N. vol. I p. 213 \* 33 S. N. vol. V p. 259
- \* 34 大正11卷 11114頁